

## リオの興奮から東京の熱い夏へ

その瞬間、高橋礼華（たかはしあやか）選手は両手の拳を天に突き上げながらそのまま倒れるようにコートに寝転がり、全身で喜びを爆発させました。一方の松友美佐紀（まつともみさき）選手はパッと後ろを振り返り、その場でピョンピョン跳ねてガッツポーズをして屈み込むと、これ以上ないような人懐こい満面の笑みを浮かべていました。オリンピックバドミントン競技で日本初の金メダルを獲得した「高松ペア」の優勝決定の場面です。ペアの愛称が「タカマツ」である故をもって、2年ほど前から大きな大会で優勝したときに祝電を打つなどして勝手連的に応援をしてきました。金メダル獲得によって「高松が世界一」と、喜びも頂点に達した感があります。

今年の夏は、本当に暑い熱い夏でした。猛暑日と熱帯夜が続いた連日の外気温の高さもさることながら、8月5日から21日まで、17日間にわたって地球の裏側で開催されたリオデジャネイロ五輪での日本選手の活躍に、寝不足気味になりながらも、日本全体が大いに湧き上がり、熱くなりました。金メダル12個を含む41個のメダル獲得は、前回のロンドン五輪の38個を上回り、過去最高ということで、4年後の東京五輪に向けて大きな弾みがつきました。ただし、今回の五輪でも残念ながら高松市出身の出場選手はおらず、香川県出身で見ても、陸上棒高跳びの荻田大樹選手一人でした。4年後の真夏に開催される東京五輪が今回以上に熱く盛り上がることは間違いないでしょう。その時には是非とも本市出身選手などの身近な選手の晴れ舞台での大活躍を期待したいと思います。

ところで、このコラムの連載が今回で100回目を迎えました。市長に就任した年の8月に「文化の重視と人間性の回復」と題して一文を掲載してから、市長選挙期間中の2度の休載を挟んで9年と2ヶ月で100回に到達です。「市長どっとコム」の名称は、市民の皆さまとのコミュニケーションを大切にしたいとの趣旨です。時にはご叱正をいただくこともありましたが、温かいご意見などは、本当に励みになりました。今後ともあまり肩苦しくなりすぎないように気をつけながら、時々話題を記していきたいと思っております。お付き合いのほど、宜しくお願いします。